

6. Elderly onset RAの1例

山本晋士, 鈴木昌彦, 金 泰成
玉井 浩, 山中 一, 渡辺英一郎
(千大)

症例は76歳男性。左膝関節痛を主訴に発症。近医で変形性膝関節症として加療受けるも後に多関節炎出現。Elderly onset RAと診断される。左膝関節痛著明となり歩行困難出現し当科入院。発症後2年で左人工膝関節置換術施行した。当科において1989年から1999年の10年間にTKAを施行したEORA症例は男性2例, 女性8例の計10例であった。発症時にOA変化など認められる関節には急速に破壊が進む可能性があることを念頭に置く必要がある。

7. 骨軟骨欠損を伴う大腿骨内側顆骨折に対する自家培養軟骨移植の1例

井上 玄, 和田佑一, 佐粧孝久
中川晃一, 高橋謙二, 藤田耕司
佐野 栄 (千大)

骨軟骨欠損を伴う大腿骨内側顆開放骨折に対し, 定期的に自家培養軟骨移植を行ったので報告した。患者は21歳, 女性。交通事故で受傷し, 1ヶ月後に骨軟骨欠損の状態当科入院となった。荷重部の広範な骨欠損部に骨移植術を施行し, その際に非荷重部より軟骨を採取し培養を行った。4ヶ月後, Brittbergらの方法に準じて, 荷重部の軟骨欠損部に自家培養軟骨移植術を施行した。短期間ながら術後経過は良好である。

8. 成人くる病に対して大腿骨骨きり術を施行した1例

古志貴和, 鈴木昌彦, 金 泰成
萩原義信, 玉井 浩, 山中 一
渡辺英一郎 (千大)
亀ヶ谷真琴 (千葉県こども)
李 泰鉉, 常泉吉一, 宮城 仁
(千葉リハセンター)

症例は54歳女性。くる病による下肢の高度内反変形に対し, 左大腿骨骨切り術を施行した。Orthofix 創外固定器を用いて, 大腿骨の内反を31度, 過前捻を29度矯正し, mechanical axis deviationは77mmから40mmに改善した。骨癒合には約5ヶ月を要したが, Orthofix 創外固定器は有効であった。くる病の下肢変形に対する骨切り術としては, 渉猟し得た限りでは最高齢であった。

9. 股関節鏡が有用であった化膿性股関節炎の2症例

脇元順一, 原田義忠, 神川康也
三橋 繁, 山下桂志, 鈴木千穂
赤松利信, 渡辺英一郎(千大)
三枝 修, 小林照之
(成田赤十字)

化膿性股関節炎の2例に対して股関節鏡を施行した。症例1は10歳の女児で特に誘因なく熱発・股関節痛出現し, 川崎病も疑われた患者で, 症例2は40歳男性で右大腿骨骨幹部骨折術後の変形性股関節症に対し関節造影を施行した所, 熱発・股関節痛出現した。共に化膿性股関節炎の診断にて股関節鏡による緊急手術を施行し満足な結果が得られた。今後化膿性股関節炎に対して股関節鏡は広く用いられて良い手法である。

10. 骨折治癒過程における DAN 遺伝子の発現と局在

清水純人, 山崎正志, 中島文毅
後藤憲一郎, 小笠原明, 中島 新
鈴木弘仁 (千大)

DAN 遺伝子は癌抑制遺伝子としてクローニングされたが, 最近 BMP の antagonist としての機能が明らかにされた。BMP は骨形成蛋白であり, それを調節する DAN の遺伝子発現と蛋白局在を正常骨軟骨, 骨折治癒過程において検討した。(in situ hybridization, 免疫染色, Northern blotting) DAN 遺伝子, 蛋白は骨軟骨組織に広く存在しており多彩な機能が推察された。

11. 走行運動が成長期ラットの骨密度に及ぼす影響

萩原義信, 後藤澄雄, 山縣正庸
西須 孝 (千大)
福田 俊, 長谷川正午, 飯田治三
(放医研)

運動の骨等への影響を検討するため, ラットを用いて走行実験を行った。脛骨骨密度は, コントロール群より週4日・5日・6日走行群が有意に大きかった。増加体重・骨格筋重量はコントロールより運動群のほうが大きく, そのため骨形成が促進されたのではないかと推察された。一方 TRACP は, 運動群がコントロール群より低下していた。運動により骨代謝回転は低下し, 骨吸収が抑制され, 骨密度が増加したのではないかと推察された。